数量化第Ⅲ類からえられた基本軸は以下のとおりである．

＜基本軸＞ 1. 女性的関心――男性的関心
2. 教養志向派――娯楽志向派
3. 感覚派――常識派
4. 行動派――室内派

4本の基本軸を用いてクラスター分析にかけセグメントとして有効な5グループを構成した．(表6)

＜第2のケース＞ヤングおよびアダルト・ライフ・スタイル分析

使用データ：第5回ＪＮＮデータバンク調査より東京地区の20歳～39歳の男女428名を分析

数量化第Ⅲ類からえられた基本軸は3本で前ケースより基本軸の数は減っている．

＜基本軸＞1. 自己むとんちゃく派―自己演出派
2. 家庭外志向――家庭内志向
3. おおらか生活派――生活いじけ派

3基本軸にもとづくクラスター分析の結果，5グループを構成した．(表7)

この2つのヤングのライフ・スタイル分析は，2年間のへだたりと分析対象サンプルの年齢区分との間にはきちっとした整合性はない．16歳―24歳の層が2年後には18歳―26歳となっていることから第2のケースの20歳―34歳を対象とした分析ではやや上にずれているが，それぞれの分析によって構成されたクラスター間には特性的にみてかなり対応すると思われるライフ・スタイルがあらわれている．たとえば，第1ケースの第3クラスターと第2ケースの第2クラスターや第1ケースの第1クラスターと第2ケースの第4クラスターなどはかなり対応したライフ・スタイルを示しており，時系列的にこれらのライフ・スタイルは継続してあらわれているが，それぞれのライフ・スタイルの全体に占める構成比の変化から新しいライフスタイルが登場するというよりも量としてのバランスの変化が生じているのではないかと考えられる．さらに第2のケースでは上限39歳まで分析対象としているため，第1のケースよりもいっそうファミリータイプの層がふえていることは当然のことである．しかし，ヤング時代のライフ・スタイルが基本的にはあまりかわらずに経過しているのではないかと考えられる．

ここで紹介したライフ・スタイル分析の時系列比較はまだほんの緒にとりかかった段階のものであり，今後の課題としては，より標準化されたライフ・スタイル・タイプの析出と，それらの変化の方向や大きさを測定できる分析手法が整備されることが分析上の課題であろう．

かいづか・やすのぶ　1948年生　東京放送調査局調査部　1970年　慶応大学文学部社会学科卒業後，ＣＡＣ(株)コンピュータ・アプリケーションズ，慶応大学大学院社会学研究科を経て現在に至る．

》国際ニュース《

IFACのWorkshopに出席して

長谷川　利　治

1976年2月17日から19日まで，オーストリアのウィーン市南部のツーロテル(Tourotel：ホテル名)において，IFAC主催のWorkshop on Optimization Applied to Transportation Systemsが開催され，世界各国から45名の参加があった．筆者もアジアからの唯一の参加者として，研究発表などを行なったので，この会議の概要を報告させていただく．

この会議はIFACのWorking Group on Transportation Systems(委員長はオーストリア国鉄のRobert Geuser氏)によって，第1回の会議として開かれたもので，その中心話題は，どのような手法が，交通システムにおける最適化問題に応用されているか，あるいは応用

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

されうるか，という点と，どのような問題がまた未解決であるのか，また将来の研究活動においてどのような分野がもっとも重要でありかつ有望であるのか，という点であった．

発表論文は22編で，交通システムのモデルあるいは交通システムの社会・経済的モデルなどに関するもの，ある特定の交通システムの評価に関するもの，航空，船舶，鉄道，道路などのシステムに関するもの，などに大別され，現況の紹介，将来の展望も含めて発表された．

3日とも，午後の最後がパネル討論にあてられ，当日の発表者，座長がパネラーとなり，前述の本会議の中心話題にそって討論が行なわれ，パネラーのみならず，多くの一般参加者も活発に討論に参加した．

このパネル討論において，現実の交通システム問題に適用できる数学的手法，OR的手法などにどのようなものがあるか，という議論が，各交通分野において討論され，理論的手法の限界が痛感されるという見解が多くのべられた．全参加者の約半数が大学，国公立研究所などからの出席者であったが，理論的研究以外は行なっていないという出席者がなかったためでもあろうが，このような見解に対して説得力のある反対はのべられなかった．

第1回のWorkshopということで，きわめてまとまった学会であったとはいえないが，参加者の間では，この学会の意義が高く評価された．今後もつづいて開催されるものと思われる．なお，一部の報告はIIASAから近日出版される予定である．

プログラムは以下のとおり．

Opening Session

SESSION 1 : TRANSPORTATION SYSTEMS PLANNING

1.1 Ross D. Mac Kinnon, Canada : Alternative Models for Optimizing Network Improvements Taking Spatial (Socio-Economic) Con-sequences into Account

1.2 Eric Jacquet-Lagrèze, Fr. Concepts and Methods Used in Multicriteria Decision-Making : their Applications to Transportation Problems

1.3 Toshiharu Hasegawa, Japan : On the Application of System Dynamics Simulation Methodology for Analysing Social Impacts of a High-Speed Mass Transportation System

1.4 Zdzistow Bubnicki, Poland : Mathematical Model and Optimization of Complex Transportation

1.6 Olav H. Jensen, Denmark : Evaluation of Public Transportation

1.7 Klaus Pierick, F.R.G. : Methods of Defining Realiability and Safety in Traffic

PANEL DISCUSSION

SESSION 2 : OPERATIONAL PLANNING

2.1 Maximilian M. Etschmaier, USA : A Survey on the Scheduling Methodology Used in Air Transportation

2.2 Robert Genser, Austria : Scheduling and Maintenance Planning in Rail Transportation

2.3 Gudmund Rognstad, Norway : Scheduling Problems in Ship Operation

2.4 Maurice Pollack : Some Elements of the Airline Fleet Planning Problem

2.5 Oli B.G. Madsen, Denmark : Optimal Scheduling of Trucks

2.6 Klaus-Dieter Wiegand, F. R. G. : Methods for Optimizing Networks of Rythmic Passenger Transportation Systems

SESSION 3 : CONTROLAND GUIDANCE OF TRANSPORTATION SYSTEMS

3.1 John J. Fearnsides, USA : A Review of Research and Development Programs of the US Department of Transportation Concerned with Automation, Control and Optimal Planning

3.2 Horst Strobel, G. D. R. : On the Applicability of Optimal Control Theory in Ground Transportation Systems

3.3 John L. Schlaefli, USA : Optimization and Evaluation Techniques for Street Traffic Control

3.4 Roberto Camus, Italy : Simulation and Graph Theory Techniques Applied to the Optimization of Centralized Traffic Control in an Urban Network

3.5 L. D. Burrow U.K. : Simulation Control and in Automatic Transport Systems

（はせがわ・としはる　京都大学　工学部）

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．